

特集へいぬ・戌へ

子どもとペット

横山 章光

はじめに

私は精神科医で、この十年以上、「アニマル・セラピー」を初めとする、人間と動物の関係についての様々な分野に関ってきました。その中で今回は特

に子どもと犬に関連することを思いつくままに述べてみたいと思います。

ペットが教えてくれるもの

ペットを飼うことで子どもたちが教わることはた

くさんあると考えられています。例えば感覚刺激、リラックス、守られている感じ、守っている感じ、感情を出せる、責任感をもつ、自尊心が上がる、元氣や笑いが出るなどです。それらは個々データとして出されつつありますし、我々の感覚としてもわかるどころです。それらの力は対人間の間ではなかなか得られない場合も多いものです。例えば人間同士なら様々な価値観や駆け引きなどが出ることを、対ペットではそれらにこだわらないために普段なら出せないような感情表現ができることもあります。特に我々人間同士のつながりでは「言葉でのやりとり（バーバル・コミュニケーション）」が中心になり、感情より先に言葉で全てを済ませようとしてしまいがちです。しかし動物とのつながりにおいては「言葉以外のやりとり（ノンバーバル・コミュニケーション）」が必要ですので、ペットを飼うことによつて表情や動きに敏感になりますし、また「相

手の立場になる」ことが重要になります。それらが鍛えられることは、その後の人間関係の中で重要になっていきます。

しかし大切なのは、親の監督があつてこそ、それらが伸びうるということです。よく「情操教育にいいから」とペットを買い与える親がいますが、特に初めてのペット飼育の場合、子どもだけでは難しいことも多く、場合によつてはこのあと紹介するベッコロスや動物虐待などにもなりかねません。ペットを飼うということは家族全員で関与することが必要でしょう。

また、特に「犬」は、飼い主という「ボス」が必要でしつつけをきちんとしなくてはならない動物です。ある種「関係性の塊」のような動物です。その犬との関係性をきちんと保つには、飼い主が社会との関係性をきちんと認知していることが第一条件となり、つまり幼い子どもが単独で犬を飼うのは不可

能です。ある程度年長の子どもでも、散歩させたりする、という犬の性格上、社会との接点があるわけですから、例えばその犬が他の人を噛んだりしてはまずいのです。よって、親が犬を飼う、ということをよく知っておいてきちんと手助けしてやる必要となります。飼っていたらどうにかなるさ、という考えはお捨て下さい。

ペットロス

英語でのペット・ロスは「ペットの喪失」それ自体を指しますが、日本ではペットを飼った後の喪失反応を「ペットロス」と呼んでいるようです。それは最愛のものを亡くしたときに私たちの中にかかる、当然の反応です。特に家族同然で暮らしているペットを亡くしたときの喪失感は強いと思われるかもしれません、また子どもにとっては「身近なものの初めての死」という場合が多いようです。ここで作られた死



▲子どもは犬（わんわん）を非常に早く認知する

への対処イメージはその後の喪失反応と関係してくる場合があるでしょう。例えば死をたいしたことと考えなくなったり、いつまでも悲しみ続けてしまうようになるかもしれません。ですからペットの死は非常に大事な時間なのです。

やはりきちんと悲しみ、それを家族たちと話し合いい、楽しかったときの事を思い出し、少しずつ消化していくのを周りが見守る必要があります。

特にまず、年齢によって死に対する感覚が違う、ということを知っておく必要があります。幼いときは死んでも再び生き返ると思っていたりして、死に対する感覚がまだ曖昧です。成長するにしたがつて、死に対するイメージができてくるとともに自分の死に対する恐怖が起こったり、ペットの死への罪責感が生まれてきたりします。年齢に応じてわかるようにお話しする必要があります。

また、ペットの死の際にはできるだけその処理の

輪の中に子ども入れることが勧められています。隠したり見せないようにしたり嘘をついたりすることは、子どもたちを孤立させたり別れのイメージを悪化させたりするかもしれません。全てを説明する必要はない場合もあるでしょうが、できるだけ家族全体でその死を悼むことが大切だと思われま

動物介在教育

最近「動物介在教育」という言葉がクローズアップされてきています。これは教育の現場に動物を取り入れ、様々なことを子どもたちに学んでもらおうという取り組みです。動物から学べることは生や死、食事や排便、世話、出産、臭いなど様々なことがあります。それらがやはり「相手の立場になる」ことを促進し、「自分たちを知る」ことにつながり、それがひいては自尊心を高めてくれることとなります。

また、犬との付き合い方を教えるプログラムもあ

り、それは噛み付き事故防止にも役立っています。可愛いからすぐに撫でに行き噛まれるケースも多く、犬との付き合いはそれなりの専門家に教えてもらう必要があるのです。

それとは別に、教育現場でなんとなく犬を徘徊させるという取り組みもされています。クラスに犬がぶらついているとみんな気が散ってしょうがないと思われるかもしれませんが、ある研究データでは、むしろ集中力が上がった、とも報告されています。

さらに米国で最近広がっている READ (Reading Education Assistance Dogs) というプログラムでは、図書館や学校などで犬に対して本を読んでもらうことで、音読が不得意な子どもを支援したりします。

動物虐待

虐待とは結局、「相手の立場になる」ことができ



▲それが作り物であっても子どもは犬の頭を撫でる

ない、つまり共感性の欠如を意味します。幼児のうちには、好奇心と探索心から結果的に動物にストレスを与えてしまうこともあります。それは動物虐待ではありません。単発的な動物いじめが見られたとしても、普通子どもはその結果が楽しくないのを知り、やめるものです。ところが年齢が上になっても故意に動物を傷つけ続ける子どももいます。ユタ州立大学のアシオン博士の研究によると、動物虐待と小児虐待と家庭内暴力はリンクしていると考えられています。つまり動物虐待が強く見られたときは、それらの関与を疑わなくてはならないということです。『子どもと動物』という本の中で彼が書いているのは、「就学前の年齢を過ぎてこの行動が続く場合、動物への身体的な危害や怪我が伴う場合、もしくは不適切な行動について子供たちに教育する親の努力にもかかわらず固執する場合、専門家に相談することが懸命な段階なのかもしれない」。

さいごに

ペット・アレルギーには注意が必要ですが、最近アメリカの研究グループが面白い結果を出して論議を呼びました。それは「生後一年間で二匹以上の犬・猫を飼うと、子どもがアレルギー疾患に罹患するリスクを低下させる可能性を示唆」しているというものです。これはまだ研究段階なので確かなこととは言えません。ただ、家庭でのペットというのは、もしかしたら精神的なものだけではなく、身体的にもなんらかの影響を子どもたちにも与えているのかもしれないね。

(帝京科学大学)